52頁カラ起ス

通汀262頁カラ起ス

8ポ二段組
28×20

改頁

一橋論叢 十二月号 追加原稿 一

十三下書 四号ゴチ ブルケイ 段ぬき二行どり

二下 鬼頭仁三郎著 9ポ

「交易理論の基礎」 12ポ 段ぬかず二行どり

杉村廣藏 五号 二上 二行どり

No. 1

本書は、新しい国際價値論を展開し、経濟理論の再建を試みた労作であつて、相當の成功を收めた興味ある書物である。表題を見るだけでは、現代重商主義以来、にわかにあらはれた物資交易を中心とした交易論の類のやうに考へられ易くもあるが、内容は

全く別個のもので、しかも本書が「交易理論の基礎」と名づけられたのは、だけの理由はある

といつて、とりわけ、凡そ交易関係相の観察をして事実ありとしなければ、に就て必ず"本つ元はせなくてはならぬ"根本の基礎的問題が、本書によつて極めて周密的確に論明されてゐるからである。それは新しい経済学理への序説であると共に、また又それ故に世界の交易の基礎を理論づけるに、少からぬ寄与をしてゐるといつてよい。

北尾用箋

20×10

No. 3

周知の如く、国際價値論は古典派経済學者によって提唱された問題の領域であるが、それらの學者の天才によっても、必ずしも首尾一貫の帰結に達してゐなかったやうに思はれる。国際貿易論が、古典派と新の理論的基礎は、それまでさまざまな視点から考察が試みられたにも拘らず、問題の提出にしても、その解明にしても、學問進歩の上に多くをかつて云らぬ分野であった。たゞ単に気にかゝられながら、

新しい成功に目を覆わることがあるかもしれない。

なかつた研究課題であるだけに、本書を通して[illegible]ような見事教授の努力は、深く注目を値するものでなければならないと思はれる。かくいわゆる、人間的天才をもつてしても容易に成功しなかつた[illegible]

しかしそれについて二つの事柄を注意して欲しいのは、すなはち第一には過去百年の「科学的経験の集積」がかなりにその課題の解明を容易ならしめたといわ

によって、国内経済の研究に比べて、遅まわりしてみたかった

ことと、第二には、[illegible]国際價値の問題が近年の経済学の理の充實[illegible]の研究

[illegible]ことを示す必要がある。鬼頭教授は、その不合理的経験と学の理的充實とを駆使して、国際價値[illegible]の問題を新しい姿で[illegible]

[illegible]わたくしの前に呈示してくれたのである。

[illegible]

[illegible]不合理的経験が進めば、[illegible]かつては妄動に過

得ずり難かつた事象の要因が、実際わかり易くなるといふことは、たとへば金本位制の貨幣と、その機能の限界とをとりあげて見てもよく理解されるであらう。金本位制が、世界の信認を得て、それを中心に国内の貨幣流通も国際的貨幣流通も一様に整いてゐた常時にあつては、金本位制の實体はなかなか明かにされ難いものがあつた。しかるに世界的流行が現出し管理通貨制に推移、金本位制の崩壊が殺るやうになつた今日では、金本位に対する吟味が

いたって自由となり、金本位制も安全を以てする通貨管理に他ならぬものだといふやうな観念が行はれることになった。金本位の勢ひ旺んなる當時には、天才をもってしても把握し得なかった消息が社會的經驗の進化の裡におのづからなる啓示を得るに至って居るのである。しかして、この自然の啓示を明かに讀みとることが學者の任務であり、古来學問上の功績をのこした人々の足跡は、それ以外の何ものでもない。今鬼頭教授が最近學界の進歩に於ける

No. 8

せる方法をとりあげて、よく問題の所在をつかむ
め、新なる問題の構成をなしとげたのである。
その節を変と
所以
はそこにあるといひたい。
著者は、国民的自主の立場と国民的均衡
の要請とをひかに調整すべきかとの現下の
重要理論の課題を、経済價値の面に即して解
明する方式を考案してゐる。この問題の
設定の仕方から、改革の貿易理論の性格を検
討し、国際分業の利益を吟味し、ついで国

北尾用箋
20×10

内均衡と国際均衡とを政策的に努力の跡をたづねて、進んで「貨幣的国民主義」の主張をとりあげて、従来の平面的なる国際均衡論の欠陥をつくと共に、新しき世界経済の構成をあらかにする試みを示した。而して著者自らの見地に立ち、その後につづく二章に於いて精細に叙せられて居る。

「文易の要諦」および「為替政策の問題」

「補論として北支に於ける為替工作の一角があつて、

No. 20

著者が

北大の理論

[redacted]

[redacted]を[redacted]の最後の二章の内論によって系統づけることがなされてみる。

従前の経済学理論がおもむね主体性の観点を欠りてみたるために、平面的均衡の状態を描りし出すにとまってみたと観る著者は、[redacted]

[redacted]立体的理論の構成はいかにしてなさるべきかの問題について、国民的生産力の総量を中心として思索をめぐらしてみる。[redacted]

のである。北尾用箋

国際性を

この国民的生産力を、自主体制として見ないで、
世界を通じての商品流通に組込みたとして均衡の
説いたところに、従来の要設が平面
的均衡に終始せざるを得ない所があつた。
たとへば国際貿易にしても、自主的なる生
産力構成の見地から、その帰趨を勘案して、
その取捨をなすことがなさうしてすべき
世界流通が基礎で
として国内均衡がそれに適合するがごとく軍
事上より限り、世界の経済構造は、

立のない市場均衡面のみに帰着する他ない。著者は、近時の経済学研究の中にあらわれた国民的自主体制の理論に批判的多くの注意を向けつつ、多元的な国民的生産力の結果の間に優劣すべき交易の事態を証明することを試みて、主体的理論としての交易乃至国際均衡を検討せんとしてみる。しかるに多数此等の問題としても、この国内的生産力の動きに関聯せしめた此等研究が、ひかにして可能となるかについて検討をすすめてみるのである。

北尾用箋

20×10

個人の陰なの思設の批評あるいは取扱いにおいて、[illegible]思論を主としはさむ余地がなしめずではなく、また之の主体的理論の構成に於いて、[illegible]固定的目的乃至固定的機能を通じて固定なる價値概[illegible]のもつべき重要性[illegible]について、[illegible]

なくの問わべきものがあることは明かである。しかし全体を再考察するとき、若者が言はんと欲するところは、異なる価値に表明されて居り、その指向せもとした陰翳は、綜

倫理論の新しい構成に寄与するものがあるなら

[illegible]

点で、手書の價値を高く認めなくてならぬとらなら。

若しも[illegible]をいへば、此文工作の跡をたづねた神論がもつと生動した現實の描出であつてほしかつたことである。若者が、この論説に於ては、交易ならびに序前述の如く、婚の問題の實證的解明を試みたのであらうと

15

15

No.

推測されるだけに、この一文のうちに、大東亜戦争以後のわれわれの身辺の事象に取材した隠喩自在な理論の展開をやってもらたかった。

と記したものに、理論の推進がなく、事件の推移を

理論を見出したというものは、意の視に慣れながら、数多くはない。文部事務以来、前例なき経験と

相当そぐわなく、

従来の理論をもつては基礎づ

北尾用箋

20×10

No.

ゆ得ないものがあるだけに、多数の研究努力は、従来にあるものとは根底の相違を必要とし、未だ理論にまうなっているが、それにも拘らず、研究の成果は、必ずしもこの事態に適じたものとなりつゝあるのではないか。若者の研究者がその理論的方法を組織にはたらかせて、この欠陥を補い、安易に大事の経済態勢の真相をつかゝることを、なつて、さえたらと思ふものである。

三二頁。定價四・二〇 大理書房発行

北尾用箋

20×10